みどりの風

平成27年11月2日発行
校報 第524号
〔みどりの風 第67号〕
練馬区立関町北小学校

余 白

校 長　大野 泰弘

「余白」という言葉があります。

「余白」とは、辞書の中では「字や絵などが書いてある紙面で、何も記されないで白く残っている部分」〔大辞泉より〕と記されているので、文章を読みやすくするための工夫の一つとして、文字文化の中のことと捉えがちです。

しかし、先日、ある冊子の中に掲載されていた一企業の広告に、この「余白」という言葉があり、それを読みながら、あらためて「余白」の意味を考え直してみることにしました。

そこに書かれていた文面は、次のような内容でした。

> **余白には「 」がある。**
>
> 余白には「心」がある。
> 歌舞伎でいう余白とは、演じる者の心を置く「間」。
> そこには目には見えない、耳には聞こえない価値観が存在します。
> それは、日本的な美の根幹をなす概念。
> わたしたちは伝統的な日本の美意識に根ざし、グローバルな広がりを目指します。

このメッセージは、その後、「余白には『価値』があり、『技』があり、『未来』がある」と続いていました。〔「七月大歌舞伎　筋書　寺田倉庫」のページより、一部抜粋〕

私は、「余白」という考え方が我が国の伝統文化である歌舞伎において扱われていることを知って、ほかの文化や芸術の世界にもかかわっているのではないかと思って、調べてみることにしました。

すると、「余白」という概念は、歌舞伎だけでなく、俳句、短歌、詩、音楽、絵画、落語、建築、デザインなど、数多くのジャンルの中でも重視されている考え方であることが分かりました。

例えば、俳人の黛まどかさんの言葉をお借りすれば、俳句では、「作り手の思いや伝えたい世界をわずか17文字の中で表現するために、言葉を徹底的に選び、吟味し、使っていく。俳句を作るときには、『言葉』というより『余白』を紡いでいるような気持ち」 なのだそうです。

また、詩の基本的なスタイルである定型詩は、「余白」のリズムが前提となって、その次の行に転換していく形式でもあると言えるのだそうです。詩に限らず、言葉によって作られている作品は、その言葉の意味だけでなく、言葉になっていないそれぞれの「余白」に何を感じ、読み取っていくのかが大切なのでしょう。

さらに、絵画の世界では、何も描かれていない「余白」の部分に細心の注意を払って、一つの画面を構成することが多いそうですし、石庭で有名な京都・竜安寺の庭も、置かれている石を生かしているのは、何もない「余白」の如き白い砂であるということができます。

つまり、「余白」は、それぞれの作品の中で、主題に光を当て、観る側により大きな感動を与える重要な働きをしているものと言えそうです。「余白」には何もないからこそ、多様性が潜んでおり、想像の幅を広げたり、柔軟な解釈の余地を与えたりします。そこには「余白」の美という、日本人特有の美意識も感じられます。鑑賞する側が、作品の「余白」を読み取ったとき、大きな感動がもたらされるのでしょう。

さて、本校では、今月の20日〔金〕と21日〔土〕の2日間、学習発表会が開催されます。

そこにある「余白」からどんな意味や価値を見出していただけるでしょうか。そして、鑑賞される皆様の心の「余白」に、子どもたちのどんな思いやメッセージが届けられるでしょうか。空間の間、時間の間、音と音の間、それらの「余白」を楽しみながら、子どもたちと鑑賞する皆様とが一体となって、すばらしい空間を演出していただければ有難く存じます。

子どもたちが1か月近くにわたって積み重ねてきた演劇や音楽の創造に向けた努力や熱意を受け止めていただき、たくさんのご声援を送ってくださいますよう、お願い申しあげます。